

319

283

大正六年三月 (小北河兵站守備隊戰鬪)

戰史評論

宮本武林堂發行

大正
3.28
内交



始



戰史評論

無名戰士評

成仁武夫補

第四十二回 小北河兵站守備隊の戰闘

前回と極めて密接の關係がある上に、我が後備歩兵が敵騎の爲めに四分五裂に蹂躪せられし慘怛たる大敗戦をなしたのは、これ實に第二軍兵站守備隊の黒溝臺會戰の初期に於ける戰闘であつて、頗ぶる小戰闘ではあるが多少讀者の參考となるべき點もある様であるから、これを今度は評論して見ることとしたのであるが、黒溝臺の會戰前に於ける我滿洲軍の概況を述べて見ると、第一軍は响山子東方附近より興隆屯附近に亘る線を占め、第四軍が其左方遼陽―奉天街道に至る間を守り、第二軍は更に其左方小臺附近までの陣地に據

り、其左方黒溝臺附近までの廣い間は秋山支隊が占領して居り。更に其左方黄臘坨子から小北河までの間を、今研究せんとする第二軍兵站守備隊が守つて居たのであつて。前回に評論したる田村騎兵第二旅團は一月十六日の頃に、第一軍の方から轉じて此の兵站守備隊の更に左翼に進出して、其主力が吳家崗子附近に位置して全滿洲軍の左翼を警戒することになつたのであつた。然るに敵は一月以來頻りに兵力を其右翼に集める模様なので、我軍に於ても少しも油斷することなくこれに對する籌策を運らし、此田村騎兵旅團の第一軍より遠く西方に移轉したのも、つまりは其敵の兵力西方集中の眞意如何を搜索せんが爲めであつたのはいふ迄もないが。當時我軍に於ては敵が此方面から攻撃を企てたる場合に、滿洲軍の總豫備隊として緩急其方面の事に應じ得るものは、第一軍に於ては蛤蜊塔附近の第二師團の主力、第四軍では東山口附近にある後歩第十旅團と第五師團の歩兵第十一聯隊、大山總軍司令官直轄部隊としては、小河南附近の第五師團の主力と藍旗附近にある第八師團で

あつて。我軍の左翼後の方面修二堡には歩兵第五聯隊第三大隊が居り、河身泡附近には後歩第八旅團の後歩第五聯隊(第二大隊)及同第十七聯隊(第二大隊)が居る。又古城子には秋山支隊の支援として後歩第三十一聯隊が駐止して居り、今研究せんとする第二軍兵站守備隊の位置は其又西南方を占めて居たのであつて。其左には騎兵第二旅團が居るのは前にいふた如く、更にそれよりずつと西南に後退して、第三軍から出した所の諸兵連合の齋藤支隊が、牛莊城附近に居るといふ有様であつたのである。

此の第二軍兵站守備に任じたる小北河守備隊は、其兵力が後歩第二聯隊(第一大隊)及第六中隊、同第三十五聯隊(第一大隊)第二中隊、同第四十六聯隊(第三中隊)、四門編成の戦利野砲中隊、後備工兵一小隊であつて、合計歩兵七中隊砲四門、工兵一小隊といふ貧弱極まるものであつた。所が前述の如く此の方面の敵が益々増加するので油斷することが出来ずして、一月四日に後備工兵一小隊が増加せられ。状況愈々切迫しかけて來た一月二十二日に於て、更に後歩第五

聯隊第三大隊が増加せられたのであつたが、此の増加を得ると共に竹中第二軍兵站監は、其守備隊の配備を改めんとして命令を下したのであつた。當時小北河守備隊は後歩第二聯隊本部及第二大隊第六中隊欠を以て牛居、黄臘、坨子、頭泡を守らし。同第三十五聯隊第一大隊(第二中隊欠)を以て七臺子、媽々街、北大溝を占めさして。同第四十六聯隊第三中隊と戦利野砲中隊、後備工兵中隊(一小隊欠)が小北河に居たのであつたが。そこへ後歩第五聯隊第二大隊が増加せられたのであるから、第二軍兵站監は其守備地を轉換して、左の如く配備を變更せんとしたのであつて、其實行中に黒溝台會戰の敵の大襲來に衝突したのであつた。

これまでの兵站守備隊は、後備歩兵第二聯隊長伊東兎熊中佐が最上級者であるので當然その指揮に屬して、後歩第三十五聯隊第一大隊(二中隊欠)、同第四十六聯隊第三中隊、戦利野砲中隊、後備工兵中隊の一小隊は媽々街以南小北河迄を守備し、後歩第二聯隊第二大隊第六中隊欠は牛居に位置して頭泡より七台

子に至る渾河の沿岸を守備して、右翼秋山支隊と連絡をとつて居つたのであるが。工兵一小隊が増加された上に二十二日に於て前に述べた通り、後歩第五聯隊第二大隊が増加せられて、二十三日の夜には小北河に到着すべき豫定であつたので、竹中兵站監は其軍からの増加命令のあつた當日即ち二十二日に於て。今まで小北河に居た後歩第三十五聯隊第二大隊長西屋飛良少佐に、其自己の大隊(二中隊欠)と同第四十六聯隊の第三中隊と第九師團の後備工兵第一中隊(一小隊欠)に補助輸卒若干を屬して牛居に移轉せしめ。從來牛居に居つた所の後備歩兵第二聯隊第二大隊第六中隊欠を、其聯隊長伊東兎熊中佐と共に小北河に來らしめて、小北河附近を守備する爲め後歩第二聯隊第二大隊の三中隊と、新來の同第五聯隊第二大隊と戦利野砲中隊を以てして。これに左方に於て騎兵第二旅團と連絡せしめて、さて其指揮は依然これを伊東中佐に命じたのである。

伊東中佐は竹中兵站監の命令を受けて、直ちに二十三日夜に小北河に到着

すべき豫定の後歩第五聯隊第二大隊をして、西屋大隊より出しある媽々街の第四中隊と、北大溝の第一中隊とを交代せしめて、七台子にある同大隊第三中隊は其儘にして置かせ。それだけの交代が出来たなれば、西屋少佐は新に其指揮に属した諸隊と共に、二十六日までは勉めて牛居に来るべき様に命令を傳へたのであつたが、二十三日の夜には豫定の如く枳内元吉少佐が後歩第五聯隊の第二大隊を率ゐて、小北河に到着したのであつたが直ちに其交代に著手はせなんだのであつた。

それは前掲の如く兵站監の命令は二十二日に出て二十三日に伊東中佐に傳へられ、又伊東中佐の交代命令は翌二十四日の午後二時に於て、後歩第三十五聯隊第一大隊長西屋少佐と、同第五聯隊第二大隊長枳内少佐とに傳はつた爲めであつた。そこで兩少佐は直に交代に著手して、小北河に居る諸隊は即時に交代を畢り、又こゝに居た後歩第四十六聯隊第三中隊には、二十五日出發新守備地たる牛居と頭泡の中間なる五家子に向はしめ、北大溝に居た西屋

大隊の第一中隊と、媽々街に居た同大隊の第四中隊とは、明二十五日に於て交代を畢つて二十六日の朝、牛居南方の三家子へ向つて來らしめることにして、それと同様に小北河の工兵中隊一小隊欠にも同じく三家子へ前進を命じ。唯七台子にあつたる同大隊の第三中隊のみは、依然七台子を守備する如く二十四日に於て區處を終り、戦利砲兵中隊を枳内少佐に渡したる後。都ての引繼きを完了して仕舞たる二十五日の午後一時、西屋少佐は獨り其大隊本部のみを引き連れて小北河を出發し、七台子を経て三家子に向つて前進したのであつたが、約二時間後の同日午後三時七台子へ到達して見ると、始めて諸方面の情況頗ぶる不穩の有様を呈し、敵兵の各守備地に來襲せんとする形勢顯然として現はれて來たのであつたが、油斷にも手中に兵力を有せざる西屋少佐は、これを如何ともすることが出来ぬ羽目に立つたのであつた。

然るに此の二十五日の午後三時前後に、牛居の伊東中佐から急命が七台子の西屋少佐に到着したが、其命令によると状況極めて危急に瀕したれば、貴

大隊の第一、第四中隊及び工兵隊を、今夜又は明早朝牛居に到着する如く急行せしめよといふのであつて。それと共に五家子に向ひ現に前進中にある、後歩第四十六聯隊第三中隊をも、轉進して牛居に急行せしめよといふのであつたが。西屋少佐は大隊本部以外には何ものをも手中に握つて居らぬのであるから、これを如何ともすることが出来なんだのは遺憾であつたが。既に五家子へ前進中の後歩第四十六の第三中隊へは急使を出して、これは午後三時三十分に於て牛居に到着することが出来たが、これとても殆んど偶然に間に合つたといふの外はないのである。

全體此の一月の二十日過ぎには、黒溝台附近の状況は頗ぶる不穩であつたので、それが爲めに兵站守備隊にも増加兵が來たのであり、小北河守備隊の配備の變更もやつたのである。又その上に曩に第四軍で捕獲した露軍の下士の自白する所に依りて、二十日頃を期して露軍は大舉して攻勢に轉ずるといふ計畫であることを知つて、其眞偽は不明であるが油斷をするなといふこと

は、大山總軍司令官から既に各團隊長迄は、極秘を以て通牒せられて居た等であつて。斯くも時機の切迫したる場合、前方に餘り否殆んど有力なるものも居らぬ、薄弱極まる此の小北河守備隊の方面に於て、其配備を交代せしめるといふのであるから。そのやり方には少しも油斷することなく、其上迅速にこれを終了する様にせねばならぬのはいふ迄もないのであつた。

然るに伊東中佐は兵站監の命令を二十二日に受けたか二十三日に受けたかそれは明瞭でないが。命令下達が二十二日であつたのであるから、少なくとも翌二十三日の午前より遅くはなかつたに相違ない。此晩には枋内大隊が小北河に來る筈であるのであるから、猶豫することなく直ちに命令を下して、此二十三日の中に交代の區處が西屋少佐の手許に届く様にして置けば、二十四日中には交代が出来る筈であつたのに。悠々と構へて二十四日に至つて命令を下したので、其命令は同日の午後二時に始めて西屋少佐に達したのであつて、急場に瀕して兵力を増し其配備を變更するといふ考が、現在實施した伊

東中佐の處置の中には少しも見ぬのである。西屋少佐は其命令を受けると共に昨夜小北河に到着した栃内大隊と交渉して、其交代の準備はしたけれどもこれも伊東中佐と同様、左までに危急に迫つて居るとは思はなんだと見へ。其交代實施を明二十五日といふことにして、自分自身が直に引率して往ける所の、工兵中隊にまで二十六日に三家子にこいと命令して、自分獨りで單に大隊本部而已を引率して出發したのであつて。勿論左までに情況が切迫したと思はなんだのであるから、これも決して無理からぬ様に思はれぬでもないが。何故に近日に至り小北河守備隊の兵力が増加せられたか、何故に一月以來敵が此の方面に兵力を集中するか、露軍の下士の自白は果して眞か偽か。といふ様に油断なく現下の敵味方の有様を注意して觀察したならば、決して此様な緩慢なことをして居られる場合ではなかつたのであつて。伊東中佐の處置も勿論其時機に適應して居らねば、又西屋少佐のやり方も全く伊東中佐と同様なる緩慢さである。竹中兵站監は其兵力増加を知つた二十二日に

於て、直に配備變更の命令を下して居るから、これは確かに現下の危機を推知して居たのであらふが、他の兩人はこれに少しも氣が著かなんだものらしい、何といふ迂濶千萬なことであらふ。竹中大佐の命令が二十三日の朝か晝までに伊東中佐に達したとすれば、配備變更命令を此日の中に小北河の諸隊へ傳達するには左して困難はないのである。左すれば栃内大隊が此夜此地に達したのであるから、翌二十四日の午前中には北大溝も媽々街も交代が出来る都合である。若しも斯くしたとすれば二十四日の夜までには後歩第四十六の第三中隊は五家子に、西屋少佐と其大隊の第一、第四中隊と工兵中隊(一小隊欠)とは、三家子へ到着して居ることが出来たのであつて。これは別に非常に困難を感ずる程の急處置ではないのである。然るに伊東中佐が現狀にも注意を拂はずして命令を下すことも遅くなれば、又其交代して新位置に就くことを二十六日迄といふ様な、極めて暢氣な豫定のし方をしたものであるから。左なきだに頗る暢氣千萬なる、西屋飛良來少佐も、何にそれなれば急ぐには

及ばぬ、各中隊各個に交代が終つたならば二十六日に三家子に集合せよといふ様な、頗ぶる平穩無事なる時の考を以て其區處をなしたる後。二十五日も午後になつてからゆる／＼と小北河を出發して、遊山半分といふ見へて前進を始めたのであつたが。これ蓋し伊東中佐の油斷が順次に其部下に傳染したものと見るべきであつて、これは決して不問に置くべきことでないと評者は信ずる。といふのは少しく軍事的の頭を持つて居るものであれば、此時の場合が如何に危急に瀕して居たかはすぐと知れる等であつて。よしや如何に頭の惡るい人であつても、十六日に騎兵第二旅團が其左翼に加はつたのは何の爲めであつて、此の二十二日に後歩第五聯隊の柄内大隊が加勢に来ることになつたのは何故であるかと考へて。此の前後に於ける前面の敵情の漸次切迫しつゝあるに比較して見たならば、如何に時世をくれの後備聯隊附の將校なればとて、此様な時機に適合せぬ處置は出來ぬ等であると思ふのは評者ばかりではあるまい。

評者の親友であつて丁度此伊東中佐の部下に、第五中隊長を奉職して居て此時頭泡で戰死した、故陸軍歩兵少佐町野惟といふ會津出身の人があつたが。これが一月上旬に評者に手紙を寄せた中に、敵は毎日其兵力を自分等の方面に増加するが、何れは此の方面に一謀反やる考であらふといふ様なことが述べてあつて。其終りに國風一首が認めてあつた

渾の河そこの流れは知らねども

日ごとにまざる厚氷かな

彼が深く其前面の敵狀に心配して居たことは、此の一首の歌の上にもありありと見へて居るではないか、であるから此方面に居た人は何人と雖ども、これを懸念して居らなんだ者はない等である。然るに何故か其當の責任者たる伊東中佐は、それを餘りに心配して居なかつたものと見へて、頗ぶる緩慢を極めたる交代方法を取つた爲めに、まだ其交代の終了せぬ中に敵襲を受け。殆んど全隊潰亂收集し得べからざるの失敗に陥つたのは、全く此の伊東

兎熊中佐が状況を誤解して、時機に反したる餘りに悠長なる考を以て居た爲めてあつて。此敗北の罪は同中佐は決して免れることは出来ぬのであつて、隨て其以下各大隊長の如きも、相當に其罪を分たねばならぬと評者は思ふ。勿論幾層倍といふあれだけの大優勢の敵から攻撃されたのであるから、よしや充分に交代後の配備萬端が行届いて居たとしても、それは到底敗戦は免れざる數であつたには相違あるまいが。敵の多くは騎兵であつたのであるから、各守備地に新守備隊が到着して諸工事をも完了し、敵の來るのを待ち構へて居たとしたならば、敗北してからが此様な不體裁不始末には至らなんだであらふ。二十二日の命令が即日伊東聯隊長に傳はり、同聯隊長の命令が翌二十三日中に徹底して、さて翌々二十四日に於て交代を全部終了したとしたならば、全く交代を了して引繼きを仕舞たる翌日に於て、敵が各守備地前に現出するといふ段取りになるのであつて。左すれば各守地の間にも連絡がつき、萬事に都合がよかつた而已か、西屋少佐は工兵二小隊を同行して居るの

であるから。新陣地にも相當な工事を加へて堅固にすることが出来、敵が二十五日の午前から攻撃を試みても、充分これに相對抗することが出来。且つこれに對する諸準備を完了するに左まで困難ではなかつたのであつた。斯くして居つたならば多少敵の大壓迫に出會して苦戦しても、秩序ある退却をなしつゝ敵をも相當に苦しめ得たに相違ないのであるが、これが交代中の突然の出來事であつた爲めに、非常に我軍の爲めに不利益であつたのは、全く以て遺憾千萬といはねばならぬ。此小北河守備隊は此の劈頭第一の交代の時機を遅らした爲めに、黒溝臺會戦では全く失敗而已をくり返すことになつて仕舞たが、これ實に前にもいふ如く伊東中佐以下の怠慢に近き不注意と油断から生じたものと斷定するのが、此頃の流行語ではないが秉公持平の評であると評者は信ずるものである。

さて話しが少しあと戻りをする様であるが、牛居に居た此の小北河守備隊指揮官の伊東中佐は、其部下の第二大隊長たる田島義一少佐をして、第五中

隊を右方頭泡に出して黒溝臺と連絡しつゝ、此方面を警戒せしめ、それから其西北方の黄臘坨子に一小隊を出さしめた。而して牛居に居る第七中隊からも、同じく一小隊を黄臘坨子に出さしめて、此の村を第五第七兩中隊の二小隊を以て警戒し、それに騎兵第五聯隊の一小隊が黒溝臺から派遣されて、三隊相協力して此村を守備して居た。更に田島少佐は其第八中隊の一小隊を出して、陳家窩棚西方に於ける三台子に至る渾河渡場附近を警戒せしめて居たのであつたが、此の配備も頗ぶる常規に異なつたやり方であつて、渾河沿線に一小隊宛を各中隊から出させて警戒に任じ、頭泡には第五中隊の二小隊、牛居には第七第八兩中隊の各二小隊を置いたのであつたが、同一地たる黄臘坨子に二小隊を出すの必要があつたならば、それを異なつたる中隊から取る様なことをせずしてそこに一中隊を派遣したならばよかつたらふ。若し又一中隊を要せぬとしたならば、こゝには單に一小隊を派出して警戒せしめた方が適當であつて、頭泡の中隊からも一小隊、牛居の第七中隊からも一小隊を黄臘坨子

へ出して、共和政治をやらせたのはこれは至當でなかつたと評者は思ふ。これは長時日に亘る兵站の守備で各中隊の勞逸を平均する爲めに、各中隊から一小隊つゞを前線に出して、他の二小隊を後方に置いて休憩せしめるといふ手段から出たのであらふが、かゝる姑息の考からして此の時機切迫せる場合には、大切なる軍の建制を無視した配備をするのは、これは避けねばならぬことであつて、些細なことであり且つ別にこれが爲め何等大した不都合も出来なただけけれども、自分は建制不分割主義からして此様なやり方を大に排斥するのである。

牛居附近は前述の配備にあつて敵を警戒して居たのであつたが、一月二十五日の拂曉とも覺しき頃黄臘坨子の諸隊は、突然大優勢なる敵の歩兵の攻撃を受けたのであつた。然るに伊東中佐始め其様に時機が切迫して居るとは思ふて居らなんだのであるもの、況んや弱年無經驗なる小隊長のみ三人の共和政治で守備して居るのであるから、黄臘坨子の警戒に於ては頗ぶる其やり方

に油断があつたらしい。そこへまだ充分に夜のあけきらぬ午前四時半前後に、敵の強大なる包圍攻撃に出會したのであるから、此の警戒部隊の混雜と周章は實に名狀すべからざるものであつて、つまり歩哨以外は寝込みを掩撃せられた様なものであつたので。各小隊長が衣服を著けて指揮をとる間もない中に、敵は村落内に疾風の如く突入充満して、戦死するもの二十二人捕虜となるもの六十一人、合計八十三人を二小隊の中から失なつたのであるから、此の兩小隊は殆んど全滅せしめられたのであつて。就中此の捕虜の中には中尉推名熊次郎、特務曹長野口幸藏の兩小隊長が居るのであるから、其油断のし方が如何に甚だしかつたかは、此一事でも知ることが出来たのであつた。要するに彼れ第五、第七兩中隊の各小隊は、敵が其前面咫尺に大兵力を集めつゝあるを知りながら、それが何を意味しつゝあるかも知らずして、暢氣千萬にも煖かな温土爐の夢を貪つて居る所を、不意に敵から寝首ををさへられたものに相違ないのであるが。この様な不始末では二小隊は愚ろか一中隊、否々一

大隊出しても何等警戒の役にはたゝぬのである。

敵の拂曉の襲撃に仰天して一支もなく、寢ぼけ眼をこすりながら四方に潰亂した兩小隊の敗卒が、午前五時頃早くも頭泡の第五中隊へ駆け込んで、御注進／＼と殆んど命から／＼の醜態で叫んだので、こゝに始めて其一大事の起つたのを知つたる第五中隊は、直ちにこれに對する防禦の配備をとつたのであつたが。當時此中隊長たりし人は前にもいふた町野少佐であつて、其警戒隊の大々の不覺をとりしを非常に憤慨して、此の頭泡に於て大にこれが復讐をなし、力愈、敵せざるに至らば此の頭泡を枕として、一步も退ぞかず討死せんとの意氣込で、其中隊の志氣を鼓舞して準備をさ／＼怠りなかりしに係はらず。敵は輕進せず慎重に構へて漸次に前進し來り、互に火戦を交へて居る中に、勇ましく土壁の上に頭を出して油断なく、敵情を注視して居た町野中隊長は、武運拙なく第一番に眉間に一弾を受けて、残念とばかり其儘戦死して仕舞たので。遺志を繼いだる兩小隊長は必死に敵を拒止して見たが。午

前十一時頃には敵の大兵團によりて、此の頭泡も黒溝台も全く包圍せらるゝに至つたので。大勢これを如何ともなし難く恨を呑んで、東南方の三尖泡に退却せざるを得ざるに至つたのであつた。

若し此場合今少し伊東中佐が、嚴重に其警戒に就て訓示する所があつたならば、黄臘埤子の兩小隊も此程な醜態に陥る様な、大油斷大不覺を取ることもあるまいし。左すれば又相當に敵と防戦しつゝ、漸次頭泡に退却し、これと相合して一時此地に敵を防いだる上、更に退却したとしてもまだ一統一ある戦闘をなし得たであらふが。警戒部隊が不意を打たれて全滅散亂し。折角志氣の中心ともなるべき勇敢なる中隊長が、劈頭第一に戦死して仕舞たのであるから、此中隊は泣き面に蜂といふ散々なる目に會ふて、遂に三尖泡に迄退却したのであつたが。併し此第五中隊は其後の働を見ると中々健氣なものであつて、三尖泡に退却してから丁度そこに居た味方に加はり、其歩兵第五聯隊の第三大隊が頭泡に前進するを知ると共に、又々共に進んで頭泡に於け

る戦闘にも参加して。同大隊が支ふる能はずして修二堡に退却するに當つて、寡兵にして獨り陥み止まることが出来ぬので、又々此の三尖泡に退却して歩兵第五聯隊第三大隊の一部隊と共に、此の三尖泡に據つて二十五日の夜を徹したのは。隊長なき小部隊にしては流石に勇ましき行動であつて、戦死した町野中隊長も定めつ此の二小隊の行動には、地下に於て想ふに莞爾瞑目するを得たであらふと評者は思ふ。

右翼の黄臘埤子では右の通りの散々なる惨狀であつたが、左翼七台子は果して如何にあつたかといふとこれも頗ぶる危機に瀕したのであつて。此の地を守つたる後歩第三十五聯隊の第三中隊は、種田支隊に屬する騎兵第五聯隊第一中隊と共に、此の七台子に居たのであつたが。此日拂曉敵の歩兵大隊とも覺しき程の兵力のものが、三台子方面から前進して渾河渡場にありし牛居から出た、後歩第二聯隊第八中隊の警戒隊を撃退しつゝ、牛居方向に前進したのは知つて居たが。此の七台子の前面の敵情は別に變化がなかつたので、

其儘で油断なく敵のせん様を見て居る中に、午後三時になると西屋大隊長が到着したのであつたが。漸次此頃から其状況が極めて險惡に切迫して来て、午後四時になると七台子西方千五百米突に出したる、騎兵の展望哨は敵歩兵約一小隊の爲めに驅逐せられ。午後六時頃になると三台子西方の小森林の所から、敵砲六門程の砲撃が此の七台子に指向せられて、約一時間程相當に烈しい砲撃を受くるといふ羽目になつた。こゝに於て七台子守備隊はかねて準備したる、同村の北端と西端に設けたる陣地に就いて敵を待ち、騎兵第五聯隊の第一中隊は退ぞいて渾河の左岸に移り、七台子と牛居との間の警戒に任じたのであつたが、此の七台子の諸隊の處置は先以て適當であつたと思ふ。

第三中隊が陣地に就くと共に、大隊長西屋少佐もこれを督勵して、大に敵を拒止せんと努力して居たが。最早夜もとつぷりと暮れて仕舞たる、午後七時二十分頃に至つて敵は忽ち不意に急襲し來つた。其兵力は歩騎併せて約千五百といふ大優勢であるから、防戦はして見たけれども獅子奮迅の勢に突進

する千五百の歩騎兵は、とても後備歩兵一中隊位では拒止することが出来ぬので。勇戦したにかゝはらず敵は忽ち村内に闖入して仕舞たので、衆寡敵せず如何ともすること能はずして、此の守備中隊は殘念にも敵に兩斷せられて。主力は三家子を経て牛居に向つて退却し、其一部は青龍台を経て小北河に向つて退却するといふ、散々なる憂き目にあつて仕舞たのであつた。又騎兵第五聯隊第一中隊は先に渾河の左岸に移つた以來、歩兵第三中隊との連絡が夜の暗い爲めに絶へたので、三家子に退ぞいてこゝで此の夜を徹したのであつたが。後歩第三十五聯隊第一大隊長西屋飛良來少佐も、此際に於て其の名のように飛ぶことも出来ななんだものと見へて、敵に撃退せられたる第三中隊の主力と共に、午後九時前後に於て牛居に達してこゝで伊東中佐の指揮を受けて。既に五家子にゆくのを止めて此地に到着して居た後歩第四十六聯隊の第三中隊と、自己大隊の第三中隊の主力とを以て、牛居西南端を守備して此夜を徹したのであつたが。こゝで一つ不思議なのは西屋大隊の第三中隊の主力が同

少佐と同行せずして、同夜半に牛居に到着したといふことであつて。午後三時には西屋少佐は七台子に来て居たのであつて、午後七時二十分敵襲のあつた時にも七台子に居た筈である。若し左もなければ牛居へ來るのに午後九時迄もかゝる筈はないのである。して見ると敵の突入した爲めに此の第三中隊の主力も實は潰走して仕舞たので、こりやたまらぬと西屋先生疲馬に鞭打つて單騎で牛居へ飛び込んだので、そこで大隊長だけが午後九時頃に到着して、其第三中隊は夜半始めてこゝに到着したのであらふが。何れにしても此様なる大危急の場合に、其上級の指揮官が部下より先に退却して、獨り安全なる牛居へ先行するといふことは、これは實に考へねばならぬことである。西屋少佐は評者などが士官學校で教を受けた先輩であつて、常に其唇が赤くたゞれて居た爲めに、ちと尾漏な申分ではあるが雞穴といふあだ名を得て居られた同少佐の、極めて勇士であることは深く信じて疑がはぬから、此急場の時に於てよし部下より先に牛居へ駆け込んだとしても、それを決して自分だけ

早く安全の地へ就いたとは思はぬが。併し此様な場合にはそこに居合せたる高級者は自から踏み止まつて、沈著勇猛なる態度を以て敗戦を指揮して、其部下の人心を浮動せしめぬ様にして退却せぬと、全然收集すべからざる潰走に陥るべきは目前であつて。就中夜暗といふ幕に通視を遮ぎられたる場合は、更にこれを注意せぬと取り返しのつかぬ大敗戦に陥ることを忘れてはならぬ。

此の二十五日に於て最悲惨なる敗北をしたのは、黄臘埫子であつて其大部分は敵に捕虜とせられたが、それに次では媽々街の守備隊であつた。いでやこれから此の守備隊の大苦戦に就て詳細にこれを研究することにし様と思ふ。前にもいふ通り西屋大隊本部は牛居の田島大隊と守地交換の爲め、此の二十五日の午後に出發し牛居の北の五家子へ移つたのであるから。新來の栃内大隊の兵を以て、媽々街及び北大溝の西屋大隊の前哨を交代せしめねばならぬので。栃内大隊の第五中隊が媽々街の西屋大隊の第四中隊に、又其第七中

隊を北大溝の第一中隊に代らしめんとして、二十五日早朝から派遣したのであつたが。媽々街の交代に赴きたる後歩第五聯隊第五中隊は、自分達の同窓である所の大尉高橋榮橋がこれを率ゐて。同日午前十一時頃媽々街に到着して見ると、其地附近の敵情極めて切迫して交代する所の沙汰ではなかつた。そこで高橋大尉は暫く交代を実施するのを見合せて、同地を以前から守備して居た西屋大隊の第四中隊と共に、相協力してこれを防禦することに兩中隊長の相談が一決して、直ちに此の兩中隊は媽々街の西方及び北方の守備線に就いたのであつた。此の交代の中隊が今朝今少し早く小北河を出發したならば、此頃には交代し終つて居たのであらふけれども、此朝も例の悠々閑々式で午前九時に出發して交代に來たので、それが偶然の幸となつて一中隊で守るべき媽々街には、現に二中隊の上番下番兩兵力が協力して敵に當ることになつたのであつて、先以て此地の守備は稍、心丈夫であつたのである。新來中隊長高橋榮橋といふ人は朴直一方といふ人であるから、状況の容易ならぬ

のを見ると共に一休みもせずして、直ちに守備線に就いて此の寒天に其守地に於て晝食をやるといふ眞面目さであつたが。正午頃になると騎兵約八中隊程の敵は、上頂子から双樹坨附近を経て田村將軍の騎兵旅團の方に向つて前進したのが見へたが。午後三時前後までには少なからぬ騎兵が南進して、同時三十分頃になると始めて敵騎約三中隊程が、双樹坨黒坨子方向から媽々街西南門に向つて襲來した。丁度これと相前後して敵砲約四門が黒坨子方向から約二千三百程の距離を以て媽々街に向つて射撃を開始したのであつた。その中に敵の騎兵は非常に其兵力を加へて來て、黒坨子の東北方には騎兵約五百、徒歩兵約二百といふ、相當に大なる密集部隊が現出して我に向ふといふ有様。形勢實に容易ならざる模様となりかゝつたので、高橋大尉は從來より此の地を守つて居た西屋大隊第四中隊に、自己中隊の一小隊を加へて媽々街西門の南方の土壁に據つて之に備へ。残りの自己中隊の二小队を豫備として西門の側に置き、以て油断なく敵の近接を待つて居たのであつた。

其中に敵がだん／＼と近接して来るのでぼつ／＼射撃を始めたが、敵は我がそれ位の射撃にはひるまずして其前進を繼續して。黒埴子道の近傍に點綴する所の小森林や地隙をば、頗ぶる巧妙に利用しつゝ死傷を恐れずして進み来るので、射撃を以てこれを拒止することは容易ならず困難であつたが。其れこれする間に敵は約五百米突まで近接し來つて我を壓迫するので、高橋大尉は豫備隊中の一小隊をこれに加へて速に撃退せんと勉めたが。渾河の堤防に近く西南門の方から進み來れる敵は、大膽千萬にも約二百米突の距離まで進んで土壁を占領し、中々頑強に我に向つて攻撃を企だてるので、彼我非常に激烈なる火戦を繼續して居たのであつたが。午後五時頃になると北方蕭寨門の西方の高地から、又々思ひがけなく敵砲五、六門現出して、黒埴子方向の砲兵と相應じて十字砲火を注いだのであつたが。その中に日没となつて來たので兩砲兵ともに射撃を中止し、近く西南門方面に迫り居たる敵兵も亦夜に乘じて黒埴子方向に退却したる模様で、兩軍の射撃が一時全く熄むに至つた

のであつた。そこで此の高橋大尉の指揮する枋内大隊の第五中隊と、西屋大隊の第四中隊とはこゝに一先づ安心の體で、嚴重に哨兵を街端に配置して其兵を市街内に休息せしめたのであつた。

此の媽々街には前回に於て述べたる、騎兵第十六聯隊第三中隊の二小隊が今朝まで居つたので、便宜上附近の敵情をこれから聞くことが出來たのであつたから、誠に好都合であつたのであつたが。これが今朝七時過ぎに徒家窩棚へ進んで以來といふもの、全く敵情が不明になつた而已ならず、從來騎兵と同居してそれから情報を聞く習慣になつて居た、西屋大隊の第四中隊は騎兵が居なくなつても自から斥候を派遣して、上頂子や蕭寨門の敵情を搜索するの舉に出でずして、後生大事に媽々街端を專守防禦的に守備して居たので、此の村端から望見し得たる以外には、如何なるものが附近に來て居るか少しもそれを知らないのであつた。そこへ西南方から近迫したる敵兵は夜と共に退却し、又北方及び西南方からの砲撃も中止して仕舞たので、それに油斷

して氣がゆるんで仕舞い、敵は別にこれ以上に今夜新なる企圖をするものにはあるまいと考へたのであつた。朴直ながらも老練なる高橋大尉が、若しも二、三日も前からこゝに居た後ならば、まだ／＼油断はせなんだことであらうが。これは今日正午前後に初めて守備に就いた位のことであるから、何等敵情に就て充分に知る所のある筈がなく、相當に警戒はして居たけれども遠く敵方に向つて、停止斥候を出して敵の近接を速知する方法を講ずる等のことに至つては、何れの方面に於てもこれが實施を等閑に附し。唯々媽々街の村端を警戒するに止めて居たのであつたから、敵に此夜如何なる新企圖があらふやらそれは全く知らなんだのであつた。

村端を嚴重に警戒して他の兩中隊は、充分の仕度をしていつても飛び出すことの出来る様にして、夕食を済まして先づ一休みと横になりかけて居ると。突然北門方面に當つて非常に烈しき銃聲と叫喊の聲が暗を破つて突發したので、一同それとばかりに街路に飛び出し忽ちにして集合を終つて、高橋大尉

はそれを引率して北門附近に前進して見ると、敵の兵力約七八十のものが我が北門の下士哨に迫つたのであつたが、それを撃退して直ちにそこへ兩中隊全部を散開して、近よる敵を近距離にて全滅せしむべく射撃を準備したのであつたが、これが二十五日の夜風凜烈たる午後八時三十分頃であつたのであつた。

然るに敵は北門外にある舊堤防下に於て、充分に其兵力を集結したる上に其兵力二、三千を以て、闇中肅々として銃劍の槍襖を作て前進して、全然一發の射撃をもせず我が散兵線の七、八十米突前方より一度にどつと、ウラー／＼を連呼して大海嘯も斯くやとばかり、媽々街の北方一面の村端から村落内に侵入したので。待ち構へたる兩中隊は猛射を開始したけれども、闇に鐵砲の響の如く非常に其効力が少なく、随分非常な頑強なる抗抵をしたけれども衆寡非常に隔絶して居るので、如何にしてもこれを防止すること能はずして。退ぞいて村落内の家屋に據つてこゝに敵を拒止せんと企てたる高橋中隊が、

無二無三に大苦戦をくり返す間に敵が家屋に火を放つたので、愈々悲境に陥つたがそれと見たる西屋大隊の第四中隊は、其到底これを撃退することの不可能なるを知ると共に、逸足出して先づお先へともなんともいはず、不都合にも小北河へ向つて一散に飛び出して逃げたのであつた。

土地不案内なる高橋中隊は敵中に取のこされ、火責めにされるといふ大悪戦をやつて居たが。其中隊長高橋榮橋大尉が最後の勇氣をあらはし、叱咤督勵して如何にしても此の村落内の家屋を守つて、全中隊が死守するといふ大覺悟で飛びまはつて指揮する中は、辛くも持ちこたへて居たのであつたが。武運拙なく彼れが飛び来る敵弾に戦死すると共に、中隊は全然潰裂して仕舞つて非常な大格闘をくり返しつつ、一方に血路を開いてこれも今朝来た小北河へ向つて退却したのであつたが。此の夜戦の爲めに惜しむべし勇敢なりし高橋大尉以下、此の兩中隊は五十餘名を失なつたのであつた。

一體少數の兵力を以て大なる媽々街を守り、近傍の廣大なる地域を警戒す

るのであるから、到底充分なことの出来ぬのはいふ迄もないけれども。幸に附近に騎兵が居た爲めに、そのみに搜索の方面を依頼して居たのが禍で、急にそれが敵と接觸して自己旅團の方に退却して仕舞つた後は、全く敵情の不明に陥つた而已ならず、習慣の力は恐ろしいものであつて、騎兵が居なくなつても近き前面の部落を搜索することを怠つたので、今朝來蕭寨門や三台子に如何なるものが入つたかも少しも知らなんだ。これ蓋し詮ずる所西屋大隊第四中隊の怠慢であつて、それが原因となつて此様な大敗北を招くに至つたのである。高橋中隊は来たけれどもこれはまだ到着したばかりで、少しも此土地の案内を知らぬのであるから、それが爲めには西屋大隊第四中隊長が地形敵情をも充分に告知する様にせねばならぬのであるが、これも充分には行き届かなんだ模様であつて。其中に黒埵子方向から敵が攻撃して来たので、これが防禦に必死になつて居たのはよいが、其間に北方で敵が如何なる企圖をなしつつあるかに少しも氣がつかず。日没まで敵と戦つて交綏すると

共に、前にもいふ通り遠く北方又は西方に向つて、停止斥候を出すとか獨立したる下士哨を出すとかいふ、敵の近接を速に知るの手段を講ずることなく。媽々街の周圍に野蠻前哨的に歩哨を配布して其儘休憩に就いたのは、これは舊守備中隊もよくないが高橋大尉も實に確に油断であつた。現在日没前から敵の砲兵が蕭寨門西方から射撃したのであるから、此方面にも相當有力なるものが居ることは明である、して見れば大に此方面に對しても警戒せねばならぬのはいふ迄もなからふ。であるから此場合此の兩中隊長たるものは、少しの油断もなくよしや如何に寒くとも暗くとも、北は蕭寨門西は上頂子双樹坨、南は黒坨子に向つて絶へず斥候を派遣して、敵の動靜を捜るのが何より大切である。もしそれが爲めに兵力が不足であると思ふたならば、主要道路上に遠く獨立下士哨を出して敵の近接を急報せしむる手段をせねば、忽ちにして掩撃の危険が目前に迫るのは當然である。夜間しかも此の大部落の周圍に直接哨兵を配布した而已では、とても敵の急襲に對してこれを拒止する

ことの出来ぬのは、何人と雖どもこれを否認することは出来まい。これだけの準備があつたならば、よしや敗退するとしても此夜の様な潰走には至らなんだであらふ。然るに其心がけが足らなんだ上に、下番中隊長が危急に瀕して率先して逃げ出して仕舞つたので、此の夜戦は全く敗潰に陥るの外に策がないことになつて仕舞つたのであつて。此の後歩第三十五聯隊第四中隊の行動は、如何に辯護し様としても一點も適當であらふと思ふ所がないのである。親友であるからいふのではないが高橋大尉が交代に来て、敵情の急なるを見て其交代を獨斷を以て中止して、西屋大隊の第四中隊と共にこれを守り、晝間兎にも角にも此の村落を維持して、敵をして近迫せしめなんだのは確かに高橋大尉の處置が適當であつたのであるが。惜いかな地利と敵情に充分に熟して居らなんだ爲めに、夜間の警戒其宜しきを得ずして、大勇戦をしたに係はらず自分も戦死したる上に、其隊も一時潰裂するに至つたのは返すくも遺憾千萬なる結果であつたと、評者は深く同君の爲めに其不運なる最後を痛

惜するに堪へぬのである。

小北河に居たる栃内元吉少佐は第七中隊を出して、北大溝に守備となれる後歩第三十五聯隊第一中隊と交代せしめたが、二十五日の午後一時過其交代を終ると相前後して、敵の騎兵約五百騎沙溝子方向から南進し來り、其一部を以て二道溝の南端を占領したので。第七中隊は直ちに北大溝の西北端を占領して、此敵騎と對戦したが此報告を得たる栃内少佐は、第六中隊の一小隊と工兵中隊(一小隊欠)をしてこれを赴援せしむることにしたのであつたが。其中に騎兵第二旅團から歩兵來援の要求があつたので、先に東道崗に出してあつた第八中隊を引きあげて、それを敵騎の進入せんとする後老簿に急派して、田村旅團に應援せしむる様に命令したが、それはたしか午後二時少し過ぎてあつた。

北大溝増援隊たる第六中隊の一小隊と、後備工兵一中隊が準備を終つて小北河から北大溝へ進まんとして居ると。丁度其時黒埤子東南森林から退却し

て、此の北大溝の背後を通過して創台子へ移らんとする、騎兵第十六聯隊の第三中隊(一小隊欠)が退却中であつて。それを敵の騎兵約十中隊程の大集團が、小北河西方まで追撃して來たのが見へたので。こは一大事猶豫ならずと栃内少佐は直ちに戦利野砲中隊に射撃を命じて、此の騎兵第三中隊の退却を收容せしめたが。此時東道崗から轉じて後老簿に急進しつゝあつた、栃内大隊第八中隊が西埤子へ到着したので、これを以て其追撃して來た騎兵を撃退せんとしたが。敵も長追をせずして程なく西北方へ退却したので、其儘此中隊を西埤子に止めて右翼の警戒に任じたのであつたが。敵は其後益々二道溝附近に兵力を増加し、後には黒埤子方向から小北河に砲撃を始めたのであつたが、午後五時三十分頃から北大溝北方の小流に沿ふて退却を始め、忽ちにして沙溝子に向つて其影を沒したのであつた。

此場合栃内大隊長が牛居方面の守備地に赴くべき、西屋大隊の第一中隊と後工中隊とを自己の守備方面に使用したのは、これは實に不得已次第であつ

て決して無理なるやり方ではないと思ふ。若しも杓子定規にこれを牛居の方へ遣はしても、兵力の極めて寡弱なものであるから途中如何なる敵に出會して、全滅の非運に遭遇する様なことになるかも知れぬ。よしそれまでには至らずとも、到底伊東兎熊中佐の希望の如く、これが牛居へ赴援するといふ様なことは不可能であつたらふ。であるから大切な軍需物資の兵站倉庫が澤山にある、此の小北河の守備の方へこれを加へて、今目前に現出したる大騎兵集團を防ぐことに決心したのは、これは確かに適當なる獨斷のやり方であつたと評者は思ふ。それは確かに極めて適當であつたが、其第八中隊を西坨子に停止せしめたのは評者は頗ぶる不同意である。故如何となれば田村少將から其右側の危険を報じて、其應援を望んだのである以上は。多少の敵情に變化が生じ様とも、此の第八中隊は戦利野砲隊の射撃の掩護によつて、進んで先づ近き窩棚を占領して、敵騎兵の後老簿に入るのを射撃を以て妨害せしめ。更に渾河左岸に移つて我が騎兵旅團の背後に迫らんとする、大膽不敵な

る敵騎兵の行動を、創台子に退却し來れる騎兵第十六聯隊の第三中隊一小隊欠と協力して大に射撃を以て妨害したならば、敵は此れより南方には容易に進むことは出來なうであらふ。左すれば田村少將も前回に述べた様な、危急に瀕して極めて危ふき退却を餘儀なくする程には至らなうであらふ。然るに栃内少佐は騎兵旅團との連絡の絶へたるを口實として、此の第八中隊を西坨子に止めたので、敵は傍若無人にも創台子の西方まで侵入して、田村少將は全く其背後を遮断せらるゝの不安に陥つたのであつた。であるから此場合栃内少佐が此の西坨子の第八中隊を、僅か千米突ばかり西北の窩棚まで進みれば、其左翼の警戒にも都合がよい上に、騎兵旅團にも餘りに不安を感じしめずして済むのであつたが。これは栃内少佐がまだ一昨日此地に到着したばかりで、此邊の地形に通じて居らなうだ爲めに、適當なる處置が出來なうだに間違ないと思ふが、友軍の危急を傍觀したといふ様な皮肉なる評を受けるとも此場合一言の申開きは出來ないであらふ。

二十五日に於ける小北河守備隊は、かく諸方面とも散々なる慘狀を現出したのであつたが、此守備隊を指揮する伊東中佐の本據たる牛居だけは、幸にも何等の異狀なくして此一日を經過したのであつた。兵力こそ多からぬこゝには伊東中佐を始めとして田島少佐も居り、更に此夜午後九時には西屋少佐も來著したのであるから。こゝで何とか軍議をこらしたならば今少し仕事が出来さうなものであつたと思ふが、何等のなす所もなくして此の一日を經過したのであつたが。既に黄臘坨子の守備二小隊は殆んど全滅といふ非運に遭遇して退却し來り、頭泡に出したる田島大隊第五中隊も同じく其一小隊を黄臘坨子で失なつた上に、三尖泡へ退却して此地を守つて居ることも知れた筈であるし。七台子からは此夜西屋少佐が逃げて來た而已か、西屋大隊の第七中隊は敵の急襲に出會して、其主力は牛居に退却し其一部は小北河に退却したといふ始末であるから。非常に此の守備線に對して優勢なる敵が來襲して、各守備地ともに非常な苦戰に陥つたといふことは、よしや報告がなくなつても

伊東中佐には大概判断が出来ねばならぬ筈であつて、それ／＼各隊から報告をしたとすれば尙更之れを詳知した筈である。

勿論寡兵を以て此様な廣正面を守備する場合に於て。大優勢なる敵と遭遇したりとすれば到底手段の施し方がないのはいふ迄もないが。去ればとて何事をもなさずして茫然として敵の爲すに一任するといふのも、これも決して至當たる處置ではあるまいと評者は思ふ。然るに伊東中佐は此日實は處置に窮して茫然自失でもしたのか、殆んど何のなしたることもないのは頗ぶる不思議である。右に出した守備中隊も殆んど大敗を以て五家子、三尖泡と退却し、又左に居た七台子の守備隊も先以て潰走に近い有様で退却して來たとすれば、牛居の危急に瀕したることはいはずして知るべしである。此場合伊東中佐たるもの何とか處置はなかつたものであらふか、若し處置があつたとしたならばよしや出來ぬまでも無益な迄も、それを實行して此守備線に於て敵を喰ひ止めるといふ方法を講ぜねばならぬ筈である。然るに唯だ西屋大隊

に向つて至急に牛居へ來れと命じたる外には、更に何等の處置がなかつた様であるのは實に遺憾千萬である。寡兵を諸方へばらまいた所へ大敵が現出したので、如何ともすることが出来なんだといへば、それも決して無理ではないと思ふのであるが。果して然らば何故に此の牛居の村落だけでも充分に堅固に、防禦編成をするといふことに氣が著かなんだのであらふ。何れ早晚敵に攻撃せられるに相違ない運命にある此の牛居が、若しも伊東中佐の注意によつて二十五日の朝からして、必死に其中隊程の兵力を以て工事に盡力せしめたとしたならば。土地凍結して土工容易ならずとするも、如何なる方法を以てしても相當なる防禦工事は出来なければならぬ筈である。況んや此地には既に相當に永く守備して居たのであるから、既にこれまでも相當なことはしてあらねばならぬ筈である。それを歩兵二中隊を以て補修せしめて、一層これを堅固にして置いたならば、此二十五日の晝夜則ち二十四時間近い時間があるのであるから、評者の考では随分堅固なる工事を完了せしめ得た

に相違ないと思ふ。であるに係はらず伊東中佐も田島少佐も少しもそれに注意せずして、單に敵の方ばかりながめて途方に暮れて居たものらしいのである。これ實に不都合千萬である怠慢といはれても一言ないのである。單にそれ而已でない牛居附近が前述の如く敵にあらされた以上は、小北河も媽々街も思ふに同様な目にあつて居るに相違あるまい。それに對して何とか其實際を知るの方法を講ぜねばならぬのは當然であるが、これに就ても何等の處置をした様な模様がないのであつて、これでは愈以て申譯もへちまも何もない次第であると評者は思ふ。少なくとも此二十五日の午後から夜に於ては、媽々街、小北河と相連絡するに大に盡力して、必要に應じては出來得たなれば、其兵力を牛居へ招致するもよからふし。又それが不可能であれば其諸隊の取るべき方法に就て、栃内少佐に命令する所がなければならぬのである。然るに伊東中佐は此日全く何事をも爲さなんだのは、實以て迂濶千萬不覺の至りである。評者は實に残念で堪らぬのである。

斯くて二十五日の夜は先づこれ位のことでは仕舞いになつたのであるが、明れば一月二十六日伊東中佐は知つて居たか知らなんだかは承知せぬが。今迄の小北河守備隊の守備線を依然として守つて居るのは、小北河附近と此の牛居ばかりであつて他は悉く遠く後方に撃退されて仕舞つて居たのであつて。確實かどうかは知らぬが薄々は伊東中佐もこれを知つて居たらしい。其上に昨夜三家子に居つた騎兵第五聯隊第一中隊は、此の朝當の牛居へ退却して來て仕舞た上に、右方五家子に居つた等の歩兵第五聯隊第三大隊が、昨夜の中に後方修二堡に退却して仕舞たので、此の牛居の小北河守備隊司令部の位置は、全く孤立して敵中にあるといふ有様となつたのであつた。けれども二十六日の朝にはまだ敵が此近傍へは現出せぬので、今や狼洞溝の附近に集中しつゝあるべき等の第八師團が、將來必ず此の牛居の東北に進出すべきは、期待し得べき事柄であるから、此地を守つて其進來を待たんと、伊東中佐は決心したのであつた。

此決心は至當である斯くなくてはならぬのであるが、併し此の切迫した二十六日の朝になつて、始めて此の決心を堅めたのではそれでは到底間に合はぬのである。何故に昨日敵の黄臘坨子七台子を急襲奪略するを知つたる時に於て、速に此決心をしなかつたのであるか。若し此の時に此地を固守して第八師團の進來を待つた決心が定まつたならば、前にも評者がいふた様に全力を盡して村落防禦を堅固にした筈である。その上に集め得られる兵力がありとすれば、それをこゝに集結する方法をとつたに相違ないのである。然るに近く三尖泡や五家子にあつて歩兵第五聯隊第三大隊と共に戦つて居た、後歩第二聯隊の第五中隊をば牛居へ招致する方法をも講ぜねば、媽々街の守備隊の如何になりしやを確るの方法をもなさず。其上に牛居には何等の防禦工事をも著手せしめなんだのであつて、要するに伊東中佐も田島少佐も全く空々漠々で何の考もなく二十五日を過ぎしたる後、愈々孤立といふことの知れた二十六日の午前九時に至つて、始めて第八師團の進來を待つ爲めに、此牛

居を固守するといふ決心をしたのであるから、其決心は頗ぶるよいけれども其仕度がこれからではとても一週間に合はぬのである。そればかりではない騎兵第五聯隊の第一中隊が今朝こゝに退却して居たならば、速にそれを前方に出して敵の近接を知る爲めに、大に敵情の搜索をやる様に依頼すればよいのに。まだ近傍に敵が現出せぬのと命令系統を異にして居る騎兵であるといふので、終に何等の希望をも示さず又何等の任務をもこれに課せないのであつたが。此の伊東中佐といふ人はどこまで暢氣なのか、其程度が全然評者には測量が出来ぬのである。

一體此の牛居といふ村落は相當に大きな村であるけれども、西面と南北両面の一部にかけて池を以て圍まれて居るので、これが氷結して居らぬ時であつたならば、容易に敵はこれに近接することは出来ぬのであるが。今や嚴寒の最中であるからこれは何の役にも立たぬとしても、此地には伊東中佐は昨今到着したばかりといふ次第でもないから、敵の此方面に何か企圖すると

いふことが豫め謀知せられた以上は、其兵力を以てなりとも又は臨時に人夫を使用してなりとも、此村落に適當なる防禦の工事を施すといふことは緊急なる事柄であつて。若し數日の日子があつて其準備が出来たとしたならば、此の兵力で此の村落を守ることは決して難事ではなかつたと評者は思ふのである。現に田村久井少將の如きは二聯隊足らずの騎兵を以てしても、尙且つ吳家岡子を固守して此の大敵を撃退したのではないか。して見れば心がけて豫め村落防禦の編成が出来て居たならば、伊東中佐は決して此の村を棄てねばならぬ程なことはなかつた筈である。其上に頭泡に於て中隊長を失なつた後歩第二聯隊の第五中隊の如きは、速にこれを此の牛居へ收容して一刻も早く集結を終り、これをも此の守備兵中に加へるのが至當であるのに、何等これが今朝非常な敗退するに當つても少しもそれが手當をせず。彼が獨斷を以て歩兵第五聯隊の第三大隊と其進退を共にしたのを、知つて居たか知らなんだかは不明であるが、其第五中隊の位置に付て捜すことも命令することも、

何にもせずに打棄て、置いたといふのは何といふ怪しからぬことであつたらふ。これであるから遂に此の牛居は二十六日に於て目も當てられぬ大敗北をやつたのであつた。いてやこれから伊東中佐の大不始末を諸君の御覽に供して、其鑑戒となさんとするは決して無益なることではあるまい。

伊東中佐は右様な不準備ではあつたが、牛居を固守して第八師團の進出を待たんと決心したので、其手中にある部下の後歩第二聯隊第二大隊第七中隊と第八中隊を田島少佐に指揮せしめて、此の牛居の北及び西方の守備に當らしめ。昨夜到着したる西屋少佐をして後歩第三十五聯隊の第三中隊と後歩第四十六聯隊の第三中隊とを指揮せしめて、これに牛居の西方及び南方を守備せしめたのであつたが。此時前にも述べた如く伊東中佐は歩兵約一大隊と兩大隊長とを有して居たのであつて、其中の田島大隊の第七中隊は昨朝黄臘坨子で敵に急襲せられたる爲め、其中隊の一小隊を殆んど全滅せられて居るから、これが現在一小隊缺けて居るし。又西屋大隊の第三中隊も昨夜七台子退

却の折に、其一小隊が主力に合する能はずして小北河へ退却したので、これも一小隊を缺いて居るから。つまり田島西屋の兩大隊長は何れも實員五小隊を指揮して居た。即ち合計十小隊兵員約略七八百人位はあつたのであつた。

然るに敵は大に此邊の守備の堅固なるべきを考へたものと見へて、二十六年の午前中は頗ぶる用心して餘りに此の牛居に近接する模様はなかつたが。七台子及媽々街の方から正午前後になると、砲を有する大なる騎兵が渾河左岸に侵入して來たので、こゝに始めて小北河の連絡が斷絶したと戦史には記載してあるが、これは果して事實であつたのであらふか。若し此時までも小北河と連絡が通じて居たのならば何故に昨夜以來、如何にしてなりとも牛居附近に集合すべく命じたる各中隊を全部ならずとも、一部なりとも此方面へ招致するの舉に出でななんだのであつたらふ。これは少し遠く東方を迂回して牛居に向つたならば、決して不可能なることではなかつたであらふと思ふ。然るに此方法をも取らなんだ所を見ると、此の小北河と牛居との交通は既に

昨二十五日の夕方から斷絶して居たのではあるまいか。それでなくして此の二十六日の正午まで之が通じて居たものとする、評者はいよ／＼伊東中佐が何等此の方面に兵力を集中するの策に出でなんだのを、頗ぶる不思議に思はざるを得ないのである。

敵は二十六日の正午過ぎ伊東中佐の本部のある西南方、約千二三百米突を距れて居る牛居家路に騎砲二門を布列して、牛居に向つて砲撃を開始した。これが牛居の戦闘の序幕であつて。次で時を移さず牛居から西南約六百米突の所に、敵兵約五、六十現出して散開して我に向つて射撃するといふ有様で、我も亦相當の兵力を以てこれに應射せしめて居ると、驚くべし牛居西方約千六、七百米突の陳家窩棚には、砲を有する敵の騎兵大集團が我に向つて前進しつつある。其又西方約三千米突の三台子附近にも相當大なる部隊が運動するのが、遙かではあるが手に取る様に見へるのであつた。容易ならざる有様となつて來たので伊東中佐は兩大隊長に命じて其兵を守備地に就かせて、嚴重に

此の敵に對して戰備を整へつゝ、應射を始めたのであつたが。前にもいふ通りほんの腰掛け主義にこゝに駐在して居た爲めに、何等これといふ防禦の工事が施してなかつたのであるから。其防禦の困難なるは實に言語に絶したのであつたが、今となつてはこれを如何ともすることが出来なんだのであつた。其中に陳家窩棚から我に向ふ一大縱隊は、牛居の西北にはや近々と寄せ來つて、大に我れを壓迫せんとするの勢を示して來たので、油斷して居て敵の包圍する所となつては大變であると考へて、伊東中佐はこゝに二十六日の午後一時三十分に於て退却に決心したのであつたが、此決心は頗ぶる評者は不同意である。其故如何となれば伊東中佐は今現に前に現出したものを、何ものであると考たかは知らぬけれども、見る限りでは徒歩したのもあるけれども、これが歩兵でなくして騎兵であることは明白である。左すればこれは昨日來七台子や媽々街を屠つたる所の、騎兵がやつて來たといふことは明かであつて、其後方に運動するものはあるがまだ歩兵の大部隊は見へぬのであ

る。して見れば此の前面に現出したものは、敵の騎兵の大集團であるといふことは判断が出来たであらふと思ふ。果してこれを騎砲兵を有する騎兵であるとしたならば、それ程に泡を喰つて退却に決心する必要があるまい。我れ微力なりと雖も約一大隊總數七八百の兵力を持つて居るのである。敵騎の十中隊や二十中隊位のもが進み迫つたとて、それ迄に狼狽して退却に決する必要はない筈である。若しもそれだけ敵を恐ろしく思ふ程ならば、今朝其兩翼の味方が退却して孤立挺出して居ることを覺りたる、午前の九時半前後に於て其友軍と同線に退却すればよいのである。それを爲さずして第八師團の進出を待つ爲めに、此牛居に踏み止まつて居た以上は、前に騎兵の大集團が出て來たからとて、直に退却をする様なれば何の爲めに、こゝに停止するといふ決心をしたのか其理由が知れぬではないか。勿論敵の大優勢なる騎兵に對して孤立して牛居を此の兵力で守るのであるから、其困難なるはいふ迄もないことであるけれども、少し兵力に比して其村落が大きい過ぎるとはいふも

のい。前日田村少將は騎兵八中隊の力を以て、よし機關砲の加勢はあつたとしても、其徒歩戦を以て此の敵騎と對抗して殆んど全一日を持ち堪へたのではないか。其銃數と殆んど同一なるしかも歩兵を握つて居る伊東中佐が、第八師團の進出展開するの助けをせんとして毅然として牛居に止まつて居たといふ以上は、此四中隊の歩兵を全村落の周圍に配布して、頑強無双にこゝで一死戦をやつたならば、敵騎の爲めに左まで容易に蹴散らさるべき筈はないと評者は思ふ。これ蓋し此場合必ず伊東中佐の胸中に起るべき筈の考案であつて、それを輔佐すべき西屋田島兩少佐も思ふにそれを考附かぬ筈はあるまいと考へる。

であるにも係はず此の三人の上長官は、先づ砲撃を以て威嚇してそれに次で徒歩攻撃を執行しつゝ、更にそれと同時に乗馬の大集團を以て我を包圍せんとしつゝある敵騎を見て。忽ちに其凄まじき勢に氣を吞まれて仕舞つて、とてもかなはぬと臆病心を起し一同退却と決心したのは、何といふ時機に適

應せぬやり方をしたものであつたらふ。其又退却の爲めに取りたる方法が頗ぶる不都合千萬であつて、田島大隊の兩中隊からとりたる二小隊を以て牛居の村端に據らしめて、そして敵をこゝに暫時喰ひ止めて、其間に他の諸隊が修二堡に退却するといふ手筈であつたが。最早この様に敵の大騎兵集團が近迫して来て居る以上、我が退却と見たならば三面から敵がこれに追躡し來たるべきはいふ迄もない。よしや二小隊位の寡兵が牛居の村端に残らふとも、其左右は全くのがらあきであるから、敵が其速力を利用して急驅して追撃したならば、到底修二堡まで満足に退却するの見込がないのは知れて居る。てあるからどこへまでも此牛居に陥み止まつて、死を決して此の騎兵と一銃のあらん限り頑然として奮闘するが、此場合最も我に有利なる處置であるのはいふ迄もないが。若しそれをなさずして退却するといふのなれば、最早他に到底手段はないから、残してあつた西屋大隊の二小隊なり又は其他なり融通のつくものを哈爾堡附近に急行せしめ、それが收容によりて全大隊を戦闘

隊形の儘漸次に退却せしむるの外はない。然るに伊東中佐は其の策こゝに出でずして、僅に二小隊を残して敵を抗拒せしめて、他の全部を集めて行軍隊形を以て退却せんとし。しかも其第一番先頭に退却すべき大隊の行李と第八中隊の一小隊と共に、聯隊本部が劈頭第一に退却を始めたのはよいが、此非常に困難なる退却を指揮すべき聯隊長自身も、のこゝれと同じく先行せんとしたに至つては實に言語同断である。此場合指揮官自から踏み止まり總ての退却の處置をして、幸に兩大隊長も居ることであるから、其一人に一中隊なりそれ以上なり纏まつたる兵を率ゐさして、巴荒地又は哈爾堡に先行せしめて、そこに收容陣地を占めさせ。それと行李を同行せしめ。丁度此巴荒地から北坨子には部下の第五中隊が居たのであるから、それにも加勢をさせて收容に盡力させ。他の一人の大隊長と共に伊東中佐は牛居に止まつて此諸準備の出来るまで、充分に敵をこゝに喰ひ止めてさて無事に收容陣地を占めたのを見てから。其戦線の退却指揮を大隊長に任せて自分は收容陣地に先行

するとも、又は此戦線を指揮しつゝ一所に退却するともするが當然である。然るに二小隊を残して敵に當らしめて、他一切を退却せしむるといふ様な拙ない處置をした上に、あとは何分よろしく頼むといふ案排でお先へ御免蒙むつたのは大不都合である。爲めに統一を失なつたどん栗の背くらべの兩大隊長は、思ひ／＼の退却を始めたので全隊全く潰走に陥つたのは、これ實に伊東中佐の無能無責任の罪といふ外に評する言葉はないのである。さるにても三人も上長官が居りながら、何故に此牛居を死守するといふ勇ましい覺悟が定らなんだのであらふ。これ一は確かに伊東中佐が油斷して何等充分なる防禦の工事を、同地に施さなんだ爲めにこれに據つて敵を拒止するといふ自信力を起し得なんだのが、此場合思ふに大なる原因をなして居るであらふと評者は考へる。

斯くて第七、第八兩中隊の一小隊を牛居の西及び北の方面に残し、伊東中佐は第八中隊の一小隊と行李とを引率して先頭になつて、修二堡をさして退却

し其他の部隊はこれに續行せんとすると。伊東聯隊本部が牛居の東南五百米突に達した時には、敏くも我退却の状況を悟つた敵は急進して来て、最早五家子の西方で此の聯隊本部の位置と齊頭の所まで進出したのを見たのであつた。まう斯うなると志氣は大沮喪である、餘程剛勇なる隊長が自から殿戦をして、味方を退却せしめる様にせぬ以上は、中々以て秩序正しき退却をすることが出来るものでない。伊東中佐の後方には第八中隊の一小隊と行李が大部分續行して、大駈歩で逃げたばかりで他は右に左に思ひ／＼に落ちのびるといふ有様。大狼狽を極めたる同中佐は其退路の直ぐ北方に、部下の第五中隊が居るのにも全く氣が著かず、大駈足で逃げたとは實に何といふ未練至極不覺千萬なる有様に陥つたものであらふ、思ひ出すだに實に残念である無念である。

後歩第二聯隊第二大隊本部と第七、第八中隊各二小隊欠、即ち歩兵二小隊を持つたる田島義一少佐、それに續行する西屋飛良來少佐の後歩第三十五聯隊

の第三中隊(一小隊欠)と後歩第四十六聯隊の第三中隊とは、其儘思ひ切つて眞一文字に修二堡へ駆歩で逃げればまだよかつたのに。敵の非常に優勢なる騎兵が牛居の東北方から、其東側即ち自分の退却方向へ迂回せんとする最中であるのを見て恐れをなして。ぼつ／＼敵は見へるけれどもまだ其兵力が寡弱であると見たる、南方洪家窩棚の方へ方向を轉じて駆け出したのであつた。そこで田島少佐は洪家窩棚と三家子の中間を目標にして退却すると、其後方に續行すべき筈の西屋少佐は、其西方の三家子を目標として退却することになつた。即ち此の危急の場合で其兵力を集結して退却しても、尙且つ其危険は實に測るべからざるものがあるのに。東方と東南方と南方といふ三方に向つて、それでなくても寡弱千萬なる兵力がばら／＼に退却することになつて仕舞つたのであるから、其結果たるいふに堪へざるは述ぶるまでもない。

第一番に退却を始めたる伊東中佐の、第八中隊の一小隊と各隊の行李の大部分とは、目的の如く修二堡へ到着したが、それでも途中少なからず牛居東

北方の敵砲から苦しめられた。此先頭の行進の難儀なる有様を見て後續部隊は、其行進の方向を轉じたのであつたが、轉進して見ると其方向にも既に敵が相當に居たのであるから、中々以て容易に退却を思ふ様に實行することは出来なんだ。といふのはもう此時には敵騎五百程が三家子の北端を占領し、其東の洪家窩棚にも兵力未詳の敵騎が居り、何れも其村端に據つて徒歩戦を開始したる而已か。三台子の東方には敵砲四門急遽來つて放列を布いて、此方面に方向を轉じたる田島西屋兩大隊の退路を扼して仕舞つたのであつて、其退却の困難なるは實に名狀すべからざるものであつた。

爲めに田島少佐の率ゐる後歩第二聯隊の第七、第八中隊の大部分は、其大隊本部及び大隊長を棄て置いて又々其退却の方向を變換して。これに牛居に最後まで残つた兩中隊の各一小隊も加はつて、午後三時五十分頃に修二堡に逃げ込んで伊東中佐の指揮下に歸つたが。先に進んで置いてけ堀を喰つた田島少佐の大隊本部は、第七中隊の一部と共に總員たつた二十二二人、本部分行李の

一部と共に田島少佐に随がつて洪家窩棚に向ひ。つまり此の一部隊は散りちりになつて如何なる方向に退却したか知れぬが、此夜午後十一時三十分に遠く河公堡に退ぞいて、全く自己の大隊の兵員とは分離して仕舞て、西屋少佐の隊に此地で合したといふことである、何といふなまさない有様になつたものであらふ。

西屋少佐は最初三家子を目標として轉進したが、随分こゝには澤山の敵が據つて銃火をこれに指向するので、到底突破して退却するのが不可能であると考へたので。更に方向を東方に轉じて洪家窩棚に向ひ、まだ澤山に同村に敵騎が居らぬに乗じて、一時其敵騎を撃退して同村内に侵入したけれども。非常に優勢なる敵が三家子の方と北方から勝に乗じて追撃するので、とてもても此地に停止することが出来ず。快活で面白い男だが餘り沈著した方でもない飛良來少佐は、例の雞穴といふ尊稱を得たる口を遠慮もなく大に開張して、退へくを連呼しつゝ、無念千萬にも後羅家臥子へ逃げ込んだが。其有様

の如何に悲惨にして又同少佐の狼狽したる風姿が如何に滑稽であつたかを考へる毎に、評者は其困難なる退却を指揮しつゝも、尙其部隊を散亂させまいとして轉けつまるびつ、周章してかけ廻る有様が實はありくと目の前に見へる様な心地がするのである。さて後羅家臥子にとり付いて土民から敵情を尋ねると、既に修二堡は敵手に落ちて仕舞つて伊東中佐はそこには居らぬ模様なので、更に東方遠く迂回して此後歩第二聯隊の部隊に合せんとして、趙家臥棚に退ぞき次で王大人屯まで退却したのは此日午後二時頃であつたが。そこへ騎兵第五聯隊第三中隊の一小隊が同じく退却して來たのでそれをも合して、飛良來先生熟、現在の状況を考へて見ると朝來の戦鬪、就中逃げ廻りの大心配で部下兩中隊の疲勞は容易でないので、こゝで又敵と相衝突しては大變と考へて退りもさがつたり、終に思ひ切つて河公堡まで退却して仕舞つたが。それでも此の雞穴殿は其部下を手中に握つて放棄せなんだだけでも、まだく少しは感心してやる事が出来るが。此夜々半に至つてどこをどうし

て逃げて来たか知らぬが、此の西屋少佐の兩中隊のあとを追ふて、命からがら逃げ込んだる田島少佐の如きは。全く其部下も其上官をも見失なつて仕舞つて、御苦勞千萬にも此の遠方の河公堡まで、雞穴先生のあとを慕つて来たなどは全く以て口にも繪にも描くことの出来ぬ、不始末千萬なる潰走の仕方であつたと、評者は實に呆然たらざるを得ないのであつて。此の場合の退却は全く潰走であつて、決して退却などといふべき立派なものでなかつたのである。

田島少佐の大隊本部と西屋少佐の兩中隊とは左様な次第であつたが。伊東中佐の方は如何にといふにこれも實に目もあてられぬ有様で、其行李も其部隊も殆ど各方面に分散して、思ひ／＼に退路をとつて修二堡へ退却して。同村に居たる歩兵第五聯隊第一中隊の一小隊の收容を受けて、後歩第二聯隊第七第八中隊の大部分と行李の大部とを集合整頓したが、それでもまだ巴荒地、北埧子に部下の第五中隊の居ることに氣がつかず。午後四時頃になると敵の

徒歩兵約二中隊と、騎兵約五中隊、砲八門は勢に乗じて、近く同村に迫つて三面よりこれを包圍せんとしたので。一時これと對戦して見たけれども、敵には後續部隊が澤山にあるものであるから、又しても我が退路に迫らんとして、此村落の南方を経て東方に進む一集團があるのを見て。到底守る能はざるを知つて午後四時三十分、行李を先頭として狼洞溝へ向つて退却し。更に北に轉じて徐家窩棚に至り、此夜午後九時三十分狼洞溝に到着して、第七中隊の一小隊を以て金家窩棚を、第八中隊を以て徐家台を占領して夜を徹した。

昨日頭泡で非常なる苦戦をしたる後歩第二聯隊第五中隊(一小隊欠)は、歩兵第五聯隊第三大隊と共に、或は進み或は退ざき早く中隊長を失なひ、其一小隊をも全滅させられた中隊としては實によく働いたのであつたが。何故に此の中隊長代理は自己の本隊たる、後歩第二聯隊の伊東中佐の許に復歸することをせずして、單に其後方に居つて歩の第五聯隊第三大隊と而已行動を共にしたのであつたらふ。これは前にもいふた通りそれを集收する處置をせなん

だ伊東中佐も手ぬかりであるが、此の第五中隊長代理も少しく注意したならば、其本隊と合して此の危急なる場合も、其戦友と共に奮戦することが出来たであらふのに、近きそばに居りながら實に惜しいことをしたものであつた。が併し此の中隊は頗ぶる勞苦を惜まずよく働いたことは、戦史の上にも頗ぶる明白であつて、戦死したる町野少佐も定めつこれは大に喜んで、地下から感謝して居たに相違ないと評者は思ふ。

要するに前にも述べた通り、此の牛居の守備隊の退却に當つて。伊東中佐は自から其退却を指揮して、先づ西屋少佐の指揮する豫備隊を修二堡に退却する途中方面に退ぞけて、哈爾堡又は巴荒地に收容陣地を占めさせ。其射撃の掩護によりて田島少佐の二中隊が、其散開したる戦線の儘を以て東方に、まつすぐに退却するといふ方法を取らずして。速力偉大なる騎兵に近迫せられながら、二小隊を残してそれに當らせて他はこれを縦隊として退却するといふ様な、頗ぶる時機に適せぬ方法をとつた爲めに此の大敗北を來したので

あつて。斯くても尙ほ其困難を我慢して最初に決定したる、修二堡に向つて一同に退却さへすれば、まだく此様に四分五裂の潰走にはならなないのであつたが。自からあとに残つて退却の困難なる指揮に當るべき、兎熊中佐が第一番に逃げ出したので、田島少佐も西屋少佐も勝手々々な處置をして。それが何れも指揮官の意圖に合せず、頗ぶる拙劣極まつたものであつた爲めに、全部潰亂したる後に其半部は遠く狼洞溝に退却し。其半部は同じく遠方の河公堡まで逃げて仕舞たのであつて、實にあはれ無慘なる敗北をやつたものであると評者は思ふ。

是れ蓋し伊東中佐も元よりよろしくないけれども、併し其大根原の主因ともいふべきは、此の日露戦役に於ける兵站守備隊の全體の取りたる主義が、大に間違つて居た爲めに此様な大敗北に陥つたのであつて。強ち伊東中佐や田島西屋の兩少佐のみを責むべきでないと思ふのは、兵站守備隊といふものは後生大事に糧秣の番人をさへすれば、それで能事了れりと考へたものが多

かつたのである、又それを指揮するものもそれを使用するものもそれで満足したものである。これが抑、の大間違ひの原因となつて、此場合の様な大不面目が生じたのである。元より後方勤務に服する兵站守備隊のことであるから、糧秣の番をするのが主であることはいふ迄もないが、随分戦線に近く其兵站線の端末を進めたことが多かつた上に、敵には速力大なる騎兵が實に澤山にあるのであるから。守備隊たるものは各兵站地に於て敵襲に對するの計畫を豫定して、閑暇があれば防禦の工事をするといふのは實に必要缺くべからざることであつて。若し兵力では到底出来ぬ場合には、兵站司令官は人夫を役してこれを速に完成せしめて、以て萬一の備へとせねばならぬのであるが。何れの兵站線を通過し何れの兵站地に宿泊して見ても、殆んど此の様な緊要なる防禦の配備の出来て居たのを見たことがない。否々それ等のことを守備隊長も兵站司令官も殆んど命令したことがあるまいと思はれる程であつて。多くの守備隊は平時の衛戍勤務の衛兵同様なる心得で居たのであつて。敵襲

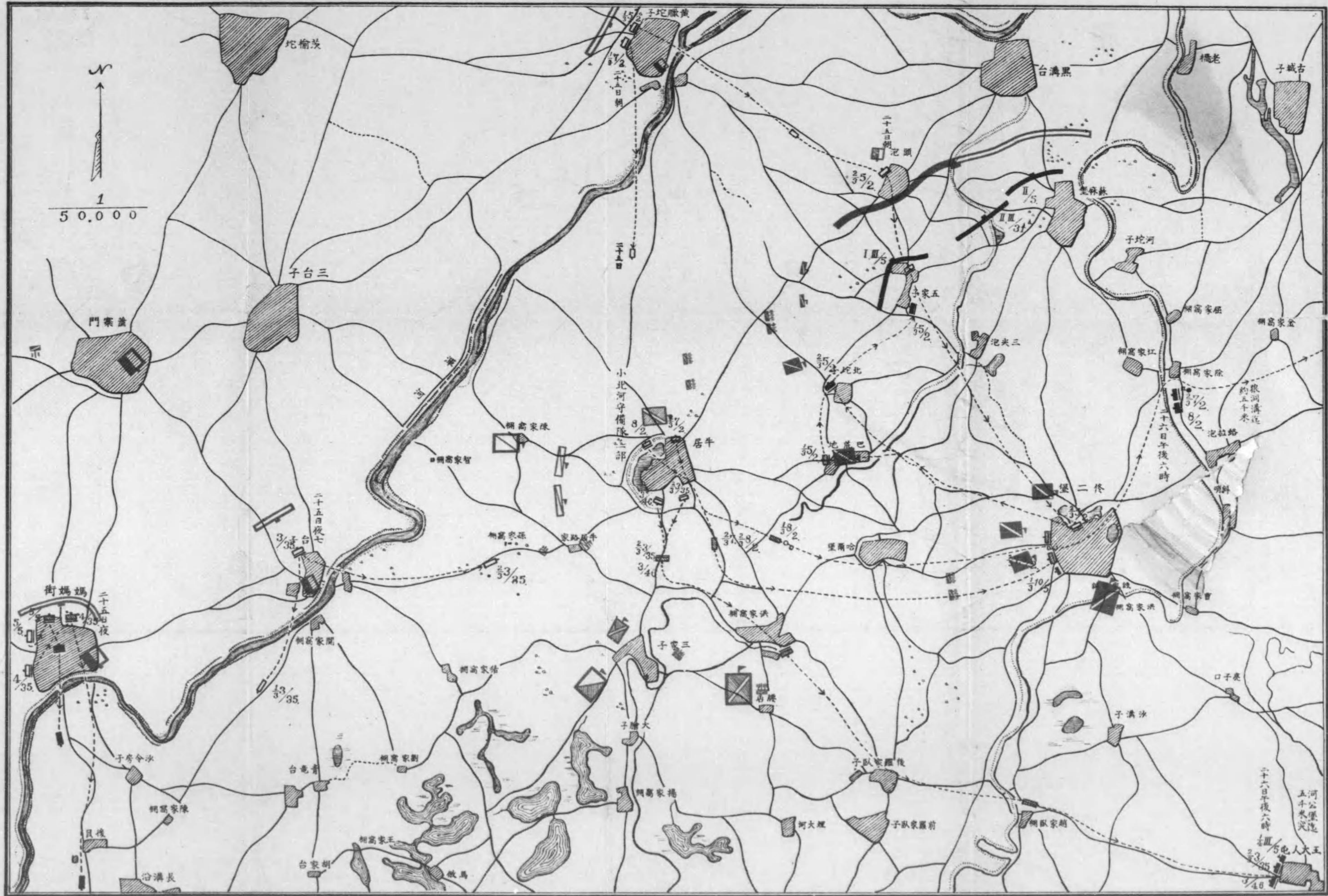
に當つての處置計畫といふ様な對敵の考慮などは殆んどなかつたのであつた。自分が戦役中實見した所では營口の兵站地には防禦の工事が施してあつて、又煙台の停車場にもほんの申譯的ではあつたが、何でも其周圍の處どころに立射散兵壕の真似方があつたかと思ふが、其外では殆んど見たことがなかつたのである。

斯の如き有様であつたので、恰かも第一線部隊と同一なる意味を含める、此の小北河守備隊の如きも、殆んど戦闘に關する顧慮には重きを置かずして、只管に勤務と交通との便宜のみを考へ、多少の工事多少の防禦計畫はして居た様であるが、それは何れも物の役にたつ程のものではなかつた。而已ならず全體に亘る其部隊の配置の如きも、單に交通連絡とか警戒とかいふ點には、多少の思考を費やしたかも知れぬが。敵襲に當つて如何にすべきかといふことには就ては、頗ぶる不充分千萬なるものであつたので、斯くも不統一極まる散々なる敗北を蒙つたのであつて。寡兵を以て廣漠無邊の地を守備すべき

兵站守備隊の如きは、今後とても随分これ以上の大敵に常に襲はれることがあるといふことを、第一番に考慮して先づ第一に何より先に防禦の計畫と、其退却等に當つての收容集結の方法手段を、充分に研究して決定し又其施設を完備し。然る後に於て糧秣番人の役目に就て勤務の方法を定むるといふ様にせぬと、此の伊東中佐の様な失態を何度もく、くり返さねばならぬと評者は杞憂するのである。であるから此敗戦は其責日露戦役兵站守備隊なるもの、根元主義の缺陷であつて、勿論其罪は決して軽くはないけれども、強ちこれを當事者たる、伊東中佐や田島少佐や西屋少佐にのみ責むるのは、それは餘りに可愛そつてあると評者は思ふ。序に附加へて置くが小北河は此日殆んど無事であつたから先以て栃内萬吉少佐萬歳であつた。

小河北守備隊之戰鬥

自一月二十五日至二月十六日



大正六年三月廿五日印刷
大正六年三月廿八日發行

〔戰史評論與附〕

著者

無名戰士

發行者

宮本林治

東京市麴町區平河町四丁目十一番地

印刷者

山田三次郎

東京市赤坂區田町五丁目十一番地



發行所

東京市麴町區
平川町四丁目

宮本武林堂

電話番町五五二八番
振替東京一〇九一二番

終

